四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 4

仁淀川の思い出

高知県　土佐市長
森田（もりた）　康生（こうせい）

南国の燦々と輝く太陽の降り注ぐ仁淀川の川面に突如として、耳をつんざく金属音、ふり返る間もなく、頭上に背後の皿が嶺の上空から急降下し飛来してきたアメリカの艦載機、グラマン戦闘機の出現に逃げ場のない急流な瀬で、小学生の私は、金突きと蝦（えび）玉が両端についた竹竿を持ってカマキリ（鮎かけ）を主に狙い、ゴリやエビ捕りに夢中になって過ごした大半の日々、台風や大雨の洪水時には何時も破堤の危機恐怖に脅えながらも数日後本流と分離した、“コマタ”と言った浅くなった小流で鮎やゴリ、ウナギ捕りに歓声をあげ、夜は灯油を灯し列をなして遡上してくるサエビ捕りなど、昔日の懐かしい日々の回想は常に豊かで清らかな母なる河、仁淀川の情景であり今も私の脳裏に鮮明に蘇ります。

そのように私たちに自然の恵みと恐ろしさを教え、共存することの大切さを実体験を通して育ぐくんできてくれた仁淀川は、常に私たちの自然教育の場であり鍛錬の道場でした。

しかし、現下の仁淀川は更に荒廃し洪水時には住居浸水等、住民の生命財産を脅かし、渇水時にはたちまち県都、高知市を含む流域住民の生活用水に大きな不安を招くなど、深刻な問題であり今後一層の河川施設整備が急がれている。

しかし問題はそれのみではない、主題は今日の山の荒廃にあろう、その手法、対策は識者の知るところ、仁淀川流域全体で英知を結集し豊かな自然の蘇生に努め、天与の財産として雄大で素晴らしい仁淀川流域の自然の恵みを子々孫々に伝えてゆくことこそ現存する私達の責務であろう。

悠久の清流、仁淀川、永遠なれ

仁淀川の情景